

「原 爆」

それは ずーっと ずーっと前の ある夏の 苦しく いやな 思い出

本多 千年

「助けて・・・助けて・・・」

と弱々しい声でさけぶ 山本さんのおばさんではなかったか・・・
今でもこの耳の奥にあの声が残っています。

今から 51 年前、昭和 20 年 8 月 9 日のできごとでした。

このできごとは、私の生きてきた今までの生活の中で、いやこれから生きていく生活の中で、最も悲しく最も苦しい、最も嫌なできごと、忘れようとして忘れられないものになると思います。

今日はそのことを初めて皆さんに知ってもらうためにお話しします。

8 月 9 日、この日は真夏の暑い日でしたが、わりと雲の多い日であったと思います。朝からむしむしして、ひどく暑さを感じる日でした。毎日のようにこんなねっとりした蒸し暑さが続いていたようです。

この日も朝から、いつものように連続して鳴る空襲警報のサイレンに「さあ、今日も始まったぞ」・・・と、このころではもう怖さよりもこのサイレンで 1 日が始まるという感じでした。しかし、7 月 29 日、8 月 1 日と続けて 2 回わたって、長崎造船所をはじめとする大きな工場、町の家々が爆弾でやられていたので空襲の恐ろしさは十分知っていました。

空襲警報が鳴ると、反射的に横穴の防空壕に逃げていくのが習慣になっていました。特に 8 月 1 日の空襲の際は近所に建設会社があり、その資材置き場に爆弾が落ち、材木が爆発の力で空高く飛ばされました。その内の電柱ぐらいの材木が私の家の屋根に落ち着き刺さっていたのをよく覚えています。もちろん片付ける余裕もありませんでした。

運命の 8 月 9 日、この朝の空襲警報はそう長いことなく解除になりました。どうして解除になったのか、わかりません。

このとき、すでにあの恐ろしい原子爆弾を積んだ B29 は、長崎の上

空に近寄っていたのでした。

何か爆音らしき物音を聞いたなと思った時、ピカッと、目もくらむような青白い、いや真っ赤、のような光りがしました。

何だろう、何が起きたのだろうか・・・

間もなく、ガガッともものすごい音とともに爆弾の強い力が、爆風が、長崎市の殆どのものを吹き飛ばし、倒し、ひきちぎり、また強い光りと熱は、人々を生きているものを一瞬のうちに焼き尽くし、焦がし、ひとかけらの炭としてしまったのでした。時、午前 11 時 2 分でした。

ここで、その日の私の家族のこと、家のことをお話しましょう。

その日、私の家には東京にいる兄が、突然、休みがとれたとって帰ってきました。

皆、大喜びで兄を中心に、座敷で父、母、妹、弟、私といろいろ話をしていました。母は、兄が久しぶりに帰ってきたので、お昼に何かごちそうをと知り合いのお店に買い物に行っていました。姉は現在、長崎大学がある場所にあった三菱兵器大橋工場というところで働いていました。その頃私は 14 歳の中学生でした。戦争がひどく、学校で勉強することはできず全員工場で働いていました。その日、午前中は学校へ行き、午後、工場へ行けばいいようになっていました。朝から空襲警報も鳴ったし、兄も帰っていたので家でゆっくりしていました。もし、学校へ行っていたら、今、こうしてここにいることはなく死んでいたはずです。

ピカッと光り、ガガッ、ガラガラッと音を聞いた後、家の中は真っ暗になりました。家が壊れています。目をつぶりました・・・ここで死ぬのかな・・・

突然、闇の中から「じっとしていなさい」と父の声がしました。

小さな妹、弟もじっとしています。

「大丈夫さ・・・」「ちょっと我慢せんば」といいながら、私も一体どうなるのだろうと不安でいっぱいでした。

時間的にはちょっとの間であったのですが、それは、長い長い、不安で怖い時間でした。

しばらくして、あたりがぼんやりと見えてきました。

家の中は見るも無残に壊れ、塀、カワラ、ガラスなどでいっぱい。

何が起きたんだろう・・・いつもの空襲と違うぞ・・・

お母さんは大丈夫かな・・・ねえちゃんは・・・と思っていると、また父の声

「さあ、自分の持ち物をしっかり持って、避難するぞ」

われに帰って、あたりを見渡すと、玄関もお店も炊事場もつぶれていました。座敷の横の茶の間の中窓が見えました。「さあ、みんなここに」と兄の声、玄関の靴を取ることもできません。はだしのままです。中窓を飛び降り家の周りを見ました。どの家も壊れていました。おじさんたちもおばさんたちも友達も、みんな顔がひきつっていました。隣のおじさんの頭から血が流れていました。その時、電柱、家の壁、軒下など、あちこちから火がでてきました。早く逃げなければ・・・そのときです。母が帰ってきました。服は汚れ、髪は乱れていたようでした。「大丈夫だった？」「怪我はなかった？」といいながら、燃え出した家をあとに防空壕へと走りました。

山本のおばさんの家のそばを通る時、「助けて・・・誰かたすけて・・・」という声がしました。いつもかわいがってもらっていたおばさんです。父を見ると、「もう、どうすることもできない」という顔をしていました。ほとんど家が壊れ、もう燃えかけているのです。家の中にいた人は、そのまま下敷きです。助けようにも助ける方法がありません。一人や二人ではないのです。だんだんに人の姿が増してきました。逃げる人、家に帰る人、勤め先へ行く人、すべての人の顔は異常でした。怪我をして血だらけの人、顔も体も髪の毛も焼けただけ見るも無残な人、着ている物が全部焼け、黒焦げになり倒れている人、動くこともできず死んだように寝ている人、ショックで頭が変になったらしい女の子の人が、ピクリとも動かない赤ちゃんを抱き、何かブツブツ言いながらただ歩く・・・

あまりにもひどいできごとに、ショックで気がおかしくなった人、〇〇町はどうになりましたか、浦上駅の近くはどうですか、なにか、わが子の名前でしょうか、大声で呼びながら走り去る人・・・ふと肩をつかまれ、はっとして立ち止まりました。どこかのおばさんでした。白の洋服は血で真っ赤です。ガラスが体にいっぱい突き刺さっていました。途中まで手をつないでいきました。稲佐橋というのがあります下を流れる浦上川には、爆風で飛ばされた人の死体が流れています。川のそばには、全身にやけどをして、汚れた川の水を飲む人、体を冷や

そうとする人がいました。痛さに、熱さに、苦しさに耐えている人、たくさん見ました。

今の私たちの生活からは、想像もできない姿です。地獄、極楽という言葉がありますがまさに地獄です。逃げました。はだしです。割れて、道いっぱいには散らばっているガラスの上を踏みながら走りました。不思議と怪我はしませんでした。いつもの防空壕へ着きました。その時、前の建物は燃えていました。ここへいては危ない。その頃父は町内会の役員をしていました。何人かの人と話し合い、山の方へ逃げることになりました。ところが大変、道がないのです。どうして？家が壊れて道をふさいでいるのです。大人の後をついて歩きました。屋根の上、カワラの上を歩くのです。すべりました。だれも何も言いません。何か言葉をかけると、今歩いている壊れた家の屋根がさらに壊れそうなのです。今考えてみても、どこをどう歩いたかよく覚えていません。

「さあ、ここで休もう」そこはみかん畑でした。近くの山から木の枝を折ってきて立てかけました。何かほっとして、体が崩れ落ちるかのようにして眠ってしまいました。気がつくと、あたりは暗く夜になっていました。その日の長崎の夜は真っ赤な火の海でした。ぼんやりと、ぼくの家も燃えているんだなあ・・・と思い、黙って見ていました。だれもがじっと見つめていました。

天と地が同じ火のかたまりのようでした。

どうしてこんなひどいことになったのか、全くわかりませんでした。これが原子爆弾のせいだということも、こんな恐ろしいものであることも知りませんでした。ふと、姉ちゃんはどのようにしているのかなあ・・・浦上方面は全滅だからというから、死んでしまったのかな・・・と考え、怖い一夜を眠れぬままあかしました。

朝になり、火もおさまりました。

「さあ、下の防空壕へ行くぞ」と、父の声でトボトボと歩き出しました。もう、はだしではありません。私たちの子供は、それぞれ非常袋といって自分の大事なものをいれて、いざという時のために用意していたのです。私たちはその中にくつを入れていました。

トンネルのようになっている防空壕にいくと、前の建物は跡形もなく燃え、灰となっていました。

防空壕の中には、怪我をした人、やけどをした人が何人も苦しそうに横たわっていました。なんだか怖くなり外にでました。

真夏の太陽は、昨日のことは知りませんといった感じで照りつけていました。

ふと、私の名前を呼ぶ声があるので、横を見ると、姉が立っていました。「よかたあ」「姉ちゃんが帰ってきたよ」と、母や妹、弟に知らせるため、防空壕の中へ走りこみました。家族みんな抱きあって、声もなく泣きました。嬉しかったですね・・・

しばらくして、「おなかですいたね・・・」「何も食べるものはないの？」と弟の声、あぁ、そうだ昨日の昼ごはんから何も食べていなかったのだ。昼、夜、朝、昼と4回も食べていなかったのです。一気におなか空っぽであることを強く感じました。

午後になり、何時ごろかわかりませんが、「おにぎりがきたよ」という声でみんな外にでました。おおきな四斗樽に白いおにぎりがいっぱい入っています。躍りあがって喜びました。両手におにぎりをもりました。でも食べられませんでした。弟や妹を見ると、今にも泣き出しそうな顔をしています。どうしてでしょう・・・

真夏の暑い日差しの中、運ばれてくるうちに腐ってしまっていたのです。

あとで聞くと、長崎市の近くの町や村の人がお米を出し合い、一晩かかって作ってくださったおにぎりだったのですが・・・それでも、あまりの空腹のために食べている人もいました。もう、がっかりして座り込んでしまいました。するとその時、神様があれわれました。夢ではありません。おにぎりを持って・・・この世にこんなごちそうがあったのか、というくらいのおいしさでした。父の友人が見舞いに持ってきてくれたのです。このおじさんがほんとの神様のような様子でした。おなか落ち着くと、自分の家の様子が気になりました。稲佐橋を渡りました。浦上川は変わらぬ流れをしていました。しかし昨日からどの誰ともわからない、死んでしまった人をたくさん浮かべて流れていました。

道にもたくさんの死体がありました。逃げてくる途中、力尽きてそのまま倒れた人もいたことでしょう。真黒に焦げた人、顔も髪も焼けて男女の区別さえわからないような人、苦しそうにもがいている人、目は明いているけれど動かずじっとしている人、小さな赤ちゃんを背負ったまま死んでいる人・・・うまく言葉で表せないほどひどい様子で

す。

苦しい・・・痛い・・・水を・・・水をください・・・

今でも耳の奥に聞こえています。どうすることも、何も、してあげられないのです。見渡す限り何も無く、工場やビルの鉄骨がぐにゃりと曲がっています。電車も焼けたまま、病院も焼け、薬屋さんも何もかも焼けてしまったのでした。犬も猫も、馬も、その時のそのままの姿で焼け焦げていました。

私の家の焼け跡には、ご飯を炊く鉄の釜が炊事場の跡にポツンとありました。家の中にあっただけの全部燃えていました。

翌々日、8月11日

稲佐小学校が病院の代わりになっていたのでもってってみました。

ふだんは皆さんと同じように勉強する教室が、治療する部屋となっていました。数人のお医者さんと看護婦さんが一生懸命に働いていました。

たくさんのけが人、やけどをして動けない人があっちにもこっちにもごろごろと寝ていました。たくさんです。私も歩きながら、寝ている人を踏みつけそうになりました。まさに地獄です。何か白い薬を体中に塗られ、じっと寝ている人、何かどうにかしてあげたくても何もできないのです。

傷口に、何か白く動く物が見えました・・・何だと思います？

ウジです。けがや、やけどのあとが腐っているのです。かわいそうですが、気持が悪くなり外に出ました。家族とも会えず、このまま死んでいくこの人たち、どうしてこんな目にあわなければならないのだろう・・・

私の姉も元気で帰ってきましたが、数日後、体の調子が悪くなり高い高い熱を出し、治療もされずに、痛みや苦しみに耐え、最後には家族みんなをみて笑顔を見せ「みんながんばってね・・・」といい、間もなく亡くなりました。19歳でした。

母も、その後からだの調子が悪くなり、寝たり起きたりの生活でしたが、昭和24年1月、原爆投下から3年5ヶ月後、病院で亡くなりました。もっともっと生きてほしかったと思います。

51年前の8月9日は、全世界の人が忘れてはならない「ナガサキの命日」です。

あの日、一発の原子爆弾で一瞬にして、73884人が命を奪われ、74904人がけがをしました。そして今もなお、多くの被爆者が次々と亡くなっています。

時は流れ、51年という年月が経ち、長崎の町も平和な美しい観光の町となりました。

皆さんは戦争を知りません。原爆の恐ろしさも知りません。

そのことを知るには、残された資料を見たり、本を読んだり、話を聞いたりしなければなりませんね。

長崎の原爆を知るには、長崎原爆資料館に、ほんとに言葉にだせない、痛ましい写真、標本、遺品があります。

平和公園の一角に「平和の泉」というのがあります。

ここにはこんなことがかいてありました。

「のどがかわいてたまりませんでした

水には 油のようなものが一面に浮いていました

どうしても水が欲しくて とうとう油の浮いたまま飲みました」

被爆した人はひどいやけどのため、みんな「水、水、」と行って死んでいったのです。どれだけ水が欲しかったのか知りません。油の浮いた水まで飲むほどに苦しんで死んでいった人、そんな水さえ飲めないで、死んでいった人も何万人といたことでしょう。ほんとうに悲しいことです。

今年も8月9日がやってきました。私のいちばん嫌な、悲しい、苦しい、さびしい日なのです。

私たちは平和です。平和ほど大事なものはありません。どんな理由があっても戦争はいけません。

みなさん、やさしい、思いやりのある心をいつまでも持ち続け、人間を不幸にするようなことを二度としない、と強く心に誓うとともに、あの日亡くなられた人、毎年亡くなっていかれた人のご冥福を、さらに、この平和がいつまでも続くことを心から願いお祈りいたしましょう。

昭和61年8月9日